

みんなでつくる 地域防災マップ作成の手引



特定非営利活動法人いわてNPOフォーラム21
盛岡市危機管理防災課

はじめに

昨今、ゲリラ豪雨と呼ばれるような局所的大雨により河川の氾濫や土砂崩れ等の災害が発生し、市民生活に多大な被害を及ぼすケースが全国的に広がっています。最近では、平成 28 年に発生した岩泉町の水害や平成 27 年に発生した熊本県の水害が記憶に新しいところです。



こうした中、懸念される大規模災害については市町村単位で防災マップが作成されていますが、大規模災害以外でも地域単位で小規模の災害は起きています。

このような市町村単位の防災マップに記載されない自治会や町内会単位の防災マップは、地域の安全安心に欠かせないものであることはもちろん、地域の状況を把握する意味でも役立ちます。

本手引は、子供からお年寄りまで、地域に暮らすみなさんで話し合いながら地域版防災マップの作成を手助けするものです。

目 次

地域版防災マップってなんだろう？	4
地域版防災マップはなぜ必要？	5
みんなで作ってみよう！！	6
作成のながれ	7
I 準備	8
II 勉強会の開催	9
III 点検ウォーキングの実施	10
IV 防災マップ作成のためのワークショップの開催	11
マップを作成時のポイント	12
地震を想定した点検ウォーキングのポイント	13
土砂災害を想定した点検ウォーキングのポイント	14

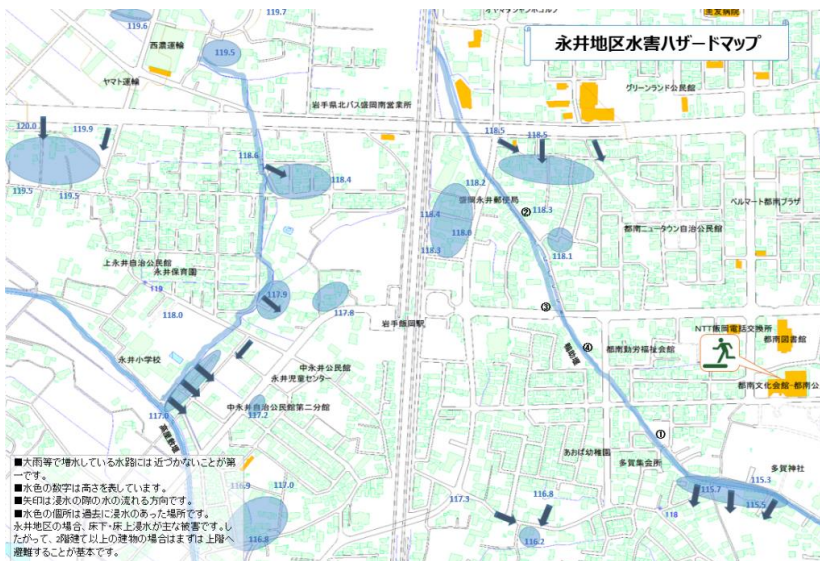
地域版防災マップってなんだろう？

「地域版防災マップ」とは、過去に発生した災害情報はもちろん、今後起こりうる可能性がある災害や危険な場所、実際の災害発生時における避難場所までの経路等を、地域住民が実際に地域を歩いて点検して確認し、その結果をマップに落とし込んだものです。

～例：水害のための地域版防災マップ～

この地域では、一定以上の降水量があった場合に地域を流れる水路があふれる被害が発生していることから、過去に発生した浸水被害地域と浸水方向を可視化、高さも目安として記入しています。

宅地の造成等により、必ずしも表示されている高さの高いところから低いところへの浸水方向とはなっていません。



👉 「防災」の視点から地域を見ることが大切です。

地域版防災マップはなぜ必要？

市町村が作成している各種防災マップでは、対象地域で予想される被害の範囲と規模を確認できますが、あくまでも対象となっている地域に限定されています。しかしながら、対象外の地域であっても実際には各種災害は発生しています。ですが、これらの細かい地域まで行政がすべてカバーすることは現実的に不可能です。

そこで、行政やNPO等のアドバイザーの協力も得ながら、地域住民が主体となり、作成するのが地域版防災マップです。

地域版防災マップでは、市町村の作成対象にはなっていない地域で、実際には発生している各種災害の被害を把握し、地域の特性をあらかじめ知っておくことで、地域住民の安全に寄与するものです。

また、完成したマップは、地域での自主防災訓練等はもちろん、地域の小学校等教育機関における総合学習の時間を利用した防災教育にも活用できることが見込まれ、地域の安心・安全について、ご家庭で保護者の方と一緒に考える良い機会にもなります。

実際に災害が発生したときにどうすればよいのか、あらかじめ知っておこう！

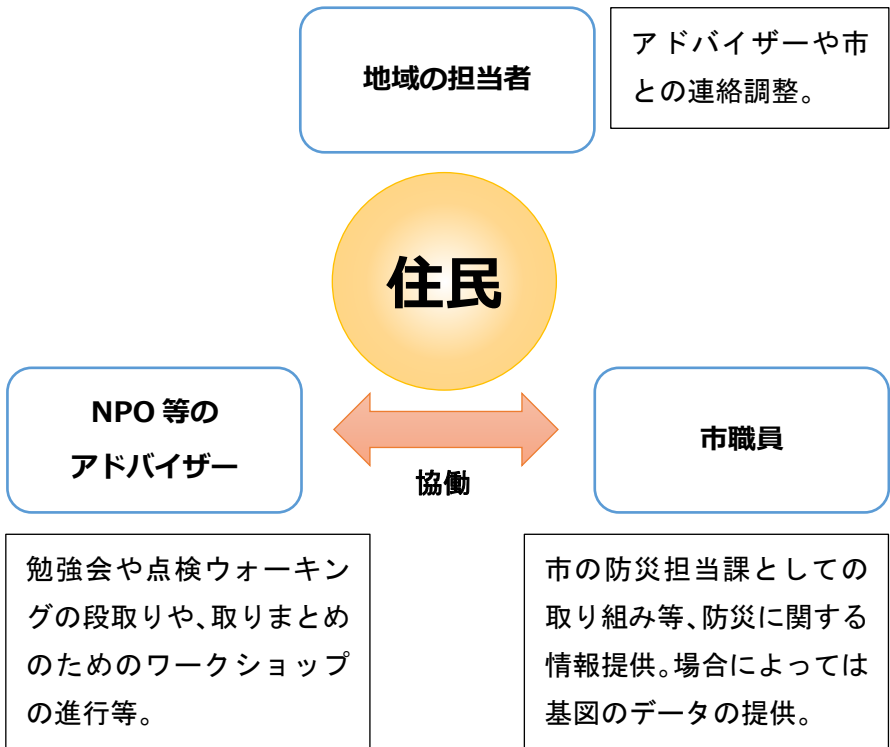


みんなで作ってみよう！

あくまでも自分たちの地域の防災マップなので、自治会・町内会単位が作成しやすいでしょう。

地域の防災担当等を中心に進めますが、実際の作成の際には、市職員はもちろん、NPO等の外部のアドバイザーも活用することがポイントです。しかしながら、主体はあくまでもその地域で生活する住民の皆さんであることを忘れずに！

～役割と協力関係のイメージ～



作成のながれ

I 準備(詳細は P8)

- アドバイザーへの支援依頼
- 対象となる範囲はどこまで？
- 役割分担
- 参加者の募集方法は？
- 市役所・アドバイザーとともに日時の設定
- 必要な道具の確認と準備

II 勉強会の開催(詳細は P9)

- 地域の災害特性にあわせた勉強会の内容を決定
- 講師等を依頼する場合はその選定
- 災害の基礎知識の学ぶ
- 地域における過去の災害の発生状況の確認
- 手引に基づき、マップ作成の手順を学ぶ

III 点検ウォーキングの実施(詳細は P10)

- 勉強会で学んだことを念頭に地域点検
- 想定される災害時の様子をイメージしながら歩く
- 避難場所や避難経路も確認

IV マップ作成のためのワークショップの開催(詳細は P11)

- 点検ウォーキングの結果を共有
- アドバイザーに結果の取りまとめを依頼
- 各グループごとに発表、活用方法等も検討

I 準備

■アドバイザーへの支援依頼

市職員と相談し、アドバイザーの派遣要請をします。

その際に支援してほしい内容を明確にしておきましょう。

■対象となる範囲はどこまで？

市職員やアドバイザーと相談し、対象地域を決めます。

過去の災害の発生状況等を参考にします。

■役割分担

市・アドバイザー・地域住民それぞれの役割分担をします。

勉強会・点検ウォーキング・ワークショップごとに、それぞれ整理していくとよいでしょう。

勉強会を例に挙げると・・・

項目	地域	市役所	AD
講師の選定と日時の決定	○	○	○
参加者の募集	○		
災害の基礎地域を知る講座			
市の災害に関する取り組み		○	
地域版防災マップの作り方			○
点検ウォーキングのポイント			○

■必要なものの準備

手引（本書）・白地図（できれば全体用に大きいものと、個人用の小さなもの）・サインペン・付箋・撮影機材 etc・・・

II 勉強会の開催

■ 地域の災害特性にあわせた勉強会の内容を決定

過去に発生した地域の災害や、現在起こりうる可能性がある災害についての情報を調べます。

■ 講師等を依頼する場合はその選定

前項で調べた災害に適した講師に講義を依頼します。

☞ 災害の基礎知識の学ぶことが目的

■ 市役所の災害に関する取り組みや情報の提供

■ 手引に基づき作成手順を確認

☞ 点検ウォーキングにおける注意事項

☞ マップのイメージをもって点検ウォーキングに参加

■ 点検ウォーキングにおけるグルーピングと役割分担

☞ 1 グループが多くなりすぎないように。目安は5名～8名程度。

☞ 役割分担は、ナビゲーター（過去の災害を前提にした道案内）、記録係（文章で記録）、撮影係（画像で記録）の3種類。

☞ 対象地域が比較的広範囲な場合は、地域をいくつかに分割し、その地域により詳しいグループを充てるとよいでしょう。



Ⅲ 点検ウォーキングの実施

実際に地域を歩いて、危険な箇所を点検して回ります。参加者一人ひとりが感じたことは、みんな同じとは限りません。この後のワークショップを充実させるためにも、それぞれがしっかりと考えましょう。

■ 勉強会で学んだことを念頭に地域を点検

■ 想定される災害時の様子をイメージしながら歩く

☞ 平常時は見えているものが災害時に見えるとは限りません。

■ 避難場所や避難経路も確認

☞ 避難場所はもちろん、災害時を想定した避難経路の確認も重要です。平常時は通れる場所が浸水により通ることができない場合もあります。

■ 過去の災害を知る参加者がいる場合、当時の様子を共有

☞ 水害であれば、どれくらいの降雨量で、どちら側から浸水するのか等、点検しながら聞いておきましょう。

■ 災害時における要支援者の確認

☞ 民選委員等と協力し、一人暮らしの高齢者や身体に不自由がある方の住宅をあらかじめ確認しておきましょう。

IV マップ作成のためのワークショップの開催

NPO 等のアドバイザーには、各グループの意見交換の際の進行や取りまとめをしてもらいましょう。

■ 点検ウォーキングの結果を共有

実際に歩いて点検してみて感じたことをグループごとに出し合い、その内容を地図に書き込んでいきます。

■ 自分たちでできる対策を検討する

先の点検で確認した要支援者の安全確認等、地域住民として自分たちができることを考えてみましょう。但し、あくまでも危険が及ばない範囲であることを忘れずに！

■ 1 グループは 5 名～8 名程度

■ 各グループごとに発表

他のグループからどんな意見が出されたのかを全体で共有します。

■ 活用方法等も検討

他のグループの内容が確認できた段階で、再度自分たちのグループ内で、完成したマップの活用方法を検討してみましょう。

☞ 地域防災学習の一環として、小学校等教育機関の総合学習で活用

☞ 今回参加できなかった地域住民に配布しての防災訓練等、様々なことが考えられます。



マップ作成時のポイント

マップを作成する際は、白地図に直接記入せずに、透明シート（OPPシート）を項目ごとに重ねて記入していくと白地図は1枚で済みます。記入すべき項目が多い場合は特におすすめです。



参考：OPPシート

白地図の上に、右の写真のように透明シートを重ね、そのシートの上に情報を記載していきます。後から重ねた際に合わせやすいよう、基準点を対角に記入しておきましょう。



記入する際は、透明シートを変更することはもちろん、情報の種類ごとにマーカーの色も変えるとわかりやすいです。

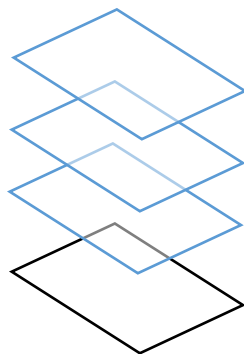
例えば・・・

透明シート③：避難経路・浸水方向等

透明シート②：浸水箇所・危険個所等

透明シート①：道路・水路・高さ等基本情報

白地図：無記入



※シート数は、記載する内容で適宜増減してください。

地震を想定した点検ウォーキングのポイント

地震直後の状況がどうなっているのかをイメージしながら避難経路や避難場所を確認しましょう。普段利用している道路が避難経路として必ずしも安全とは限りません。

☞避難場所までの安全な経路の確認

水害時と同様、まずは安全が第一です。地震の際には家屋や道路沿いの構築物の倒壊、道幅等に注意しながら点検、避難経路を設定しましょう。

☞倒壊の可能性があるりそうな建物の確認

道路沿いに老朽化等で倒壊しそうな建物がある場合、避難経路に利用するのは注意が必要です。道幅が狭い場合は特に気をつけなければなりません。

☞道路沿いの構築物の確認

建物同様、道路沿いのブロック塀等の構築物にも注意が必要です。両脇が塀で狭い道は避難中の余震で倒壊した場合、特に危険です。

☞一時避難できそうな場所の確認

大規模な地震の際は、本震の後にも大きい揺れの余震が発生します。指定された避難場所まで安全に避難できない可能性がある場合は、開けた広い場所等に一時的に避難できる場所が避難経路上にあるかも確認しましょう。

土砂災害を想定した点検ウォーキングのポイント

土砂災害の発生する可能性がある場所を確認するとともに、どのような状況になったら非難が必要なのか、過去に発生した災害も踏まえて話し合しましょう。

☞ 予兆を知る

土砂災害の多くは、発生する前に何らかの前触れがある場合が多く、これを知っておくことが命の危険から身を守ることに繋がります。

1 時間に 20mm を超える強い雨、降り始めから 100mm を超える長雨、木の裂ける音、石が転がる音、土砂等の転がり、地割れ、電柱や樹木の傾斜、斜面からの水の流出等、何かしらの異変を見逃さないようにすることが重要です。

☞ 安全な非難経路の確認

土砂の流れる方向を考慮し、避難経路を設定します。がけ崩れ等で道路がふさがれた場合や経路上にそうした危険箇所がないかどうかも考慮する必要があります。

☞ 避難経路上の河川の確認

土砂災害の恐れのため避難する際は大雨の場合が多く、避難経路に橋があるときは、増水で渡ることができないことも想定しましょう。

memo

